

親爺が作る、親爺のための、 適当で、いい加減な雑誌

Oyazine

Special
2024 09

あと何回、僕に夏はあるの？

田中公仁郎プロフィール

1963年3月25日生。佐賀県出身。
佐賀北高校を卒業、専門学校進学後除籍～宅浪～
大学進学後除籍。その後、水商売を経て広告業界へ。
23歳よりコピーライターになり、
27歳で広告企画制作会社を設立・代表取締役に就任。
広告プランナー・コピーライターと同時に
飲食業を始めとしてリゾートホテル経営や
音楽イベントの企画立案など多種多様な事業を手掛け、
さらに2011年新たに広告企画制作会社K'sを設立。
「仕事は愛。人生は恋。」をモットーに、
数々の恋をエネルギーに変換し、熱い人生を全うする。
2024年6月13日逝去。享年61歳。



【編集後記】

Oyazineは今年3月に発行した6号で一旦終了しましたが、本号は田中公仁郎追悼特別号として「いけない恋の言葉展」を誌上で再現することを目的として臨時に発行しました。

実際の展覧会で言葉のパネルを展示するにあたって、彼はその順番にもこだわりがあったので、本誌でもそれを遵守して掲載しました。真っ白いパネルに余白を生かしてレイアウトされた言葉の数々に「いけない恋」ならではの彼のせつない想いが滲んでいるように思います。生前、彼が過去の制作物やこの展覧会のデータが欲しいと言っていたのは、きつと自分のやったことを整理したかったのだと思います。そんな彼の想いを形にしてみました。果たして喜んでくれているだろうか。

「いけない恋の言葉展」は当時島製作所の近くにあったギャラリーバーD'sで開催されました。ここで僕も2回写真展をやっており、田中も来てくれました。その際に言葉展なら出来るかもしれないという話になり、言葉だけの展覧会が実現しました。彼にとってはある意味チャレンジだったかもしれませんが、展示パネルのレイアウトは、財田（島製作所スタッフ）のデザインが好きだから、彼女にお願いしたいというオーダーがあり、財田が担当しました。実は僕を含めて田中、財田の3人は本号の追悼文にある駅ビルの仕事のチームでした。

なので本号は田中が言葉（コピー）、財田がデザイン、僕が編集（ディレクション）という35年前の駅ビルのチームで作ったことになりました。

田中が余命宣告されてから、彼が何度も夢に出てきました。ある日見た夢は：「今晩俺は死ぬからこれから最後のパーティーに行く」と彼は言い、僕は彼を抱き合って別れの挨拶をし、泣きそうになったので逃げるようにして駆け出しました。しばらくして現K'sの社長の渡辺から電話があり、田中社長がパーティーで鳥さんの批判をしていると連絡が入りました。パーティー会場に行くと田中はマイクを持って「あの時、鳥さんは何もやってくれなかった…」と僕を批判しているのです。（この後の記憶がありません）

数日前の夢は、彼に相談したいことがあったのですが、彼がもういないことに気がついて、喪失感を味わう寂しい夢でした。夢の中でもやと田中がいなくなりましたが、こんな夢を見るということは僕の中で彼の存在がいかに大きかったか、ということだと痛感させられました。そして、僕にとって本号を作ることは、彼との関係が本当に終わったことを確認する作業でもあり、田中とのことを深く思い起こした数週間でもありました。そう遠くない将来、田中に会ったら、あのパーティーで僕を批判していた理由を聞いてみたいと思います。（鳥）

田中公仁郎最初で最後の個展
「いけない恋の言葉展」
2009年6月1日～13日



‘この恋が最後’と決意して結婚しながら、やがてまた別の恋にぶつかってしまう大人たち。

自らが経験した、どうにもできない胸の奥のつぶやきを、
ほんの少しですが、六本木のBarに引っ張り出してみました。

田中公仁郎

一緒にいる人は、好きな人ですか？

表紙のコピー「あと何回、僕に夏はあるの？」は、2009年に六本木のバーで開催された田中公仁郎の個展のタイトルです。
彼に、夏は、もう来ることはありません。
2024年6月13日、癌のため永眠。享年61歳。
昨年の春頃に余命宣告を受け、ほぼ宣告通りに人生の幕を閉じました。彼は、コピーライター、プランナーそして経営者でもあり、僕とは仕事を通して35年以上の付き合いでした。
昨年末（余命宣告後）、本誌最終号を作る際原稿を打診したところ、「遺言」というタイトルで書きたいという返事が届きました。しかし、体調が不安定の中、やらなくてはいけないこと、やっておきたいことなどに追われ、集中して文章を書くことが出来ず、結局叶いませんでした。
彼の最後のエッセイを読めなかった寂しさはありますが、彼への追悼の意を込めて彼の生きた証の一部を形にしたいと思い、特別号として「いけない恋の言葉展」を誌上で再現することにしました。彼はさまざまな事業をやってきましたが、彼の原点は言葉の人だったと、僕は思います。
また、創刊号で彼が寄稿した「死んだ親父の愛人と、歌舞伎町で出会った」も再掲しました。六本木で30年以上生き、たくさん恋をした（異性だけでなく）男の軌跡を少しでも伝えられたら幸いです。（島）

夏の恋に、
夏の夜は、
短すぎで。

好きなんだから、

いいじゃない。

ずっと遠くで見てたけど、
きみが、きみで、よかったな。

いい歳だけど、手をつないでもいい？

わたしを

見つけて

くれるかな。

知らない分だけ、
信じよう。

夢の中なら、いいんでしょう？

もしかして、後悔してる？

じゃあ、ちよつとだけ、
行ってきます。

ポケットの中で、
君を抱きしめた帰り道。

どこが好き？
ぜんぶ好き。
ずっと好き？

たぶん好き。

本当のことを言うと
ダメになるかもしれない。

あ
な
た
の
た
め
に
、
生
き
た
い
。
あ
な
た
の
た
め
に
、
死
に
た
い
。

終わらないから、始まらないね。

ちょっとだけなら、

ぜんぶいらない。

好きになれたらいいのにね。
嫌いになれたらいいのにね。

もしもし。
もしもし。
電話して、
ごめんね。

もういいの。

もういいの？

もういいよ。

もういいかい？

もういいの。

私の中から、出ていって。

あなたから、

さよならと、

言ってください。

もう一度
生まれてきたら
いちばんに
会いにゆくよ。

逢わなきゃよかったね。
でも逢えて嬉しかった。

言葉はいらない。
抱きしめなさい。

振り向くな。
恋はもういない。

追悼
田中とのこと 1
島 隆志

今になって、花塚さんの言葉が
ようやく理解できるようになってきました。
僕らはゴミを生み出している…その通りです。
基本的にはプロダクトに注力すべきであり、
そういう本物こそが広く世の中に受け入れられていく。
いや、広く受け入れられなくてもいい。
パンツは買えないけど、食べていけるだけの、
家族が健康に育つだけのファンがいれば
それで満足すべきであり、幸せの源だと思います。

(中略)

花塚さんの自分自身との葛藤、
願ってもどうにもできない自分。
今は、よく理解できます。
僕も、そういうことができる人間に、
来世ではなりたいと切に願うばかりです。

(以下略)

※これは田中公仁郎(以下田中)が、余命宣告を受けた後、
彼がプランナーとして最後となる仕事を僕とやった時に送られ
てきたメールの中の一節です。(文中の花塚さんとはパブルが
ピークの頃、僕と彼が在籍していた会社の社長で「今の日本
は狂っている、そして広告制作はゴミを作っているだけだ」
と断言して、会社は儲かっていたにも関わらず解散しました)

また一日、終わりに近づいた、
という事実。

追 悼
田中とのこと 2



おかしくないのに、
笑えるか。

WIZ



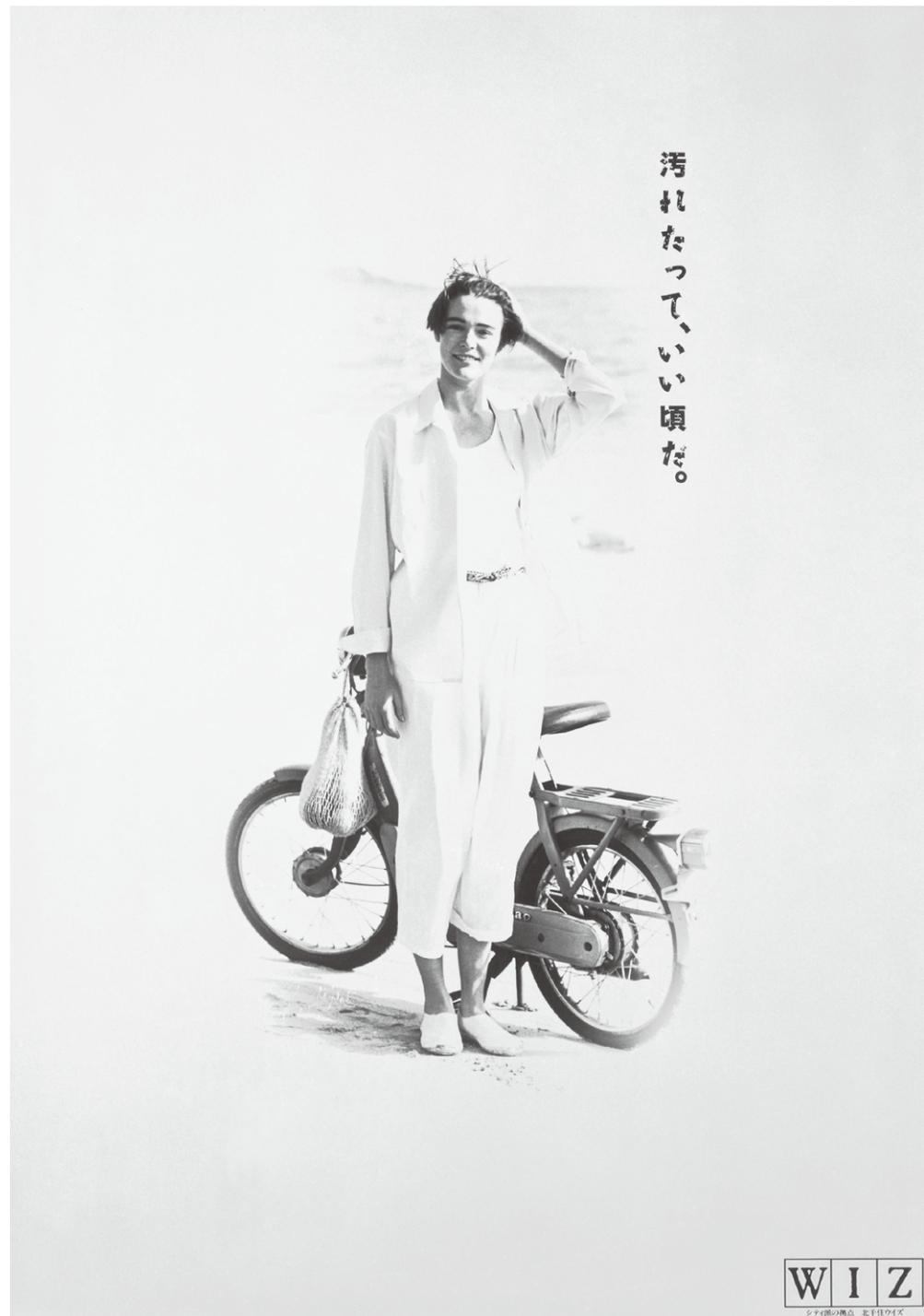
お父さんには、決められないよ。

WIZ

駅ビルの制作物をいろいろ作りましたが、彼とやった仕事の中でコピーも写真も一番記憶に残っている仕事です。僕がまだカメラマンになる前、自分の担当する仕事の撮影を始めた頃で、デジカメはまだなかったので、会社に暗室を作って夜中にプリントしていました。ロケの撮影では田中も現場を見てコピーを書きたいと言って同行しました。バブルだったから許された制作スタイルだったかもしれません。

アートディレクター・カメラマン:島 隆志 コピーライター:田中公仁郎
デザイナー:財田弘美 スタイリスト:あだちいくみ ヘアメイク:長谷川二巳男

今から35年前に僕と田中は出会いました。前述した会社のコピーライターの面接でした。僕のチームの募集で、彼が面接を担当して彼に決めました。25歳の田中はクレバーで真面目な好青年という印象でした。その時のメインの仕事は、ある駅ビルの広告及び販促物の制作でした。その中で季節ごとに制作するイメージポスターは若い女性向けのキャッチコピーが必要でしたが、それまでの装飾的なコピーをなんとか変えたいと思っていた時に彼がチームに入りました。若い女性に響くメッセージ性のあるポスターにしたいということで彼と打ち合わせを重ねましたが、時には1本のコピーの最後の数文字の言葉で意味が大きく変わるので、夜中まで議論を交わしたこともありました。それは単なる言葉の好き嫌いではなく、彼の価値観と僕の価値観の違いをリアルに感じた時でした。当時はワープロの時代でしたが、彼はポスターのキャッチコピーだけは原稿用紙に手書きにし、さらにそれをコピー案ごとに短冊状に切って持って来ました。コピーライターらしく人に伝えることにひと工夫する



汚れたって、いい頃だ。

WIZ
シブヤの拠点 北千住WIZ

田中とのこと3



熱海の飲み屋街を歩く田中

彼のこだわりでもありました。そんなやり取りを経て初めて納得のいくポスターが出来上がりました。写真はその時のポスターで、捨てられずにいまだに持っています。

1年余り彼と仕事をして破天荒な社長の一言で会社は解散し、田中はそれをきっかけに27歳で広告制作会社を設立。僕は35歳でしたが独立し、彼の会社に机を置かせてもらい、グラフィックデザイナーとして手伝いながら、遅咲きのフリーのカメラマンとして活動を始めました。上司と部下という関係から、同士の関係に変わりました。互いに切磋琢磨し、新規開拓しながら目の前のことを精一杯こなしていく日々でした。しかし、ここから付かず離れず、紆余曲折の長い付き合いが始まるとは思っていませんでした。

会社設立後、若い社長として田中はギリギリした野望を内に秘め、本領を發揮していきます。ゼロからのスタートでしたが営業職の経験もあつた彼は、それを生かして営業活動を始めまし

た。しかし、当時は起業ブームの前だったので、若い社長は珍しく、銀行や営業先のクライアントの信頼を得るのは苦労したようでした。しかし、会社員の時とは違う顔が見えるようになりました。

会社が軌道に乗り始めると、六本木の夜の営業活動が始まりました。フィリピンバブに毎日のように通い始め、いつしか「六本木の帝王」と呼ばれるまでになります。当時彼はジャガーに乗りたいたっていましたが、後々はベンツのSクラスに乗れるまで会社は成長し、VIPな生活を謳歌していた時もありました。しかし根は真面目でコピーライターらしく常に理論的でした。勿論感情的なところもありますが、それに振り回されることなく、相手の話を冷静に聞き込み、そこから弱点を見つけ出してはそれをきっかけにして仕事に結びつけるのが得意でした。言い換えれば人の足元を見るのが得意とも言えますが、それはビジネスの定石です。僕も何度か足元を見られて痛い思いもしましたが、彼の言っていることは的を

得ていたので、耳が痛くとも傾くしかなかった。僕にとっては耳障りな時もありましたが、かと言って彼を嫌いはなりませんでした。

その後、仕事が増えるに伴い社員も増え、事務所も何度か移転し、僕は移転した後のフロアーをスタジオとして借りてカメラマンの仕事が続いています。田中の会社は20人以上になって制作のスタッフをまとめる人間が必要となり、僕は彼に呼ばれてディレクター兼制作部長の職につくことになりました。その後会社はさらに成長を続け、田中は様々な分野にビジネスを広げ始めました。そんな彼の元で僕はカメラマンと広告制作の仕事をしていましたが、田中とやりたい方向はどんどんと離れていきました。さらに彼からは「鳥さんは管理職だから自分を出さようにしてください」とも言われ、カメラマンの名前を変えることもしました。しかし、管理職をやっている以上、彼の言うことは理にかなっています。そして自分は管理職向きではないのを自覚していたので、結果彼の会社から独立して自分の会社を設立することになります。

彼のやった事業を知っている限り書き出すと、居酒屋、バー、名刺事業、芸能事務所、サイパンでのリゾートホテルの経営とそれに併設するダイビングスクール、サイパンの旅行客向けのPR誌の発行とレストラン、全体の店、そして最後は中村あゆみさんをメインとした音楽のプロデュース。僕もこの中のいくつかの事業は手伝ったり巻き込まれたりもしました。全てがうまくいったわけではありませんが、中心である「広告制作会社K」は以前彼の元で営業をしていた渡辺悟氏が引き継ぎ、赤坂と神楽坂の全体の店「はんなり」は長女の海月さんが引き継いでいます。そして彼が企画立案した中村あゆみさんを中心とした音楽イベント「ママホリ」は彼女が引き継いで今年も開催される予定です。

独立後も関係は続きました。今度は同じ社長としての報告も兼ねて、月に一度ぐらい飲んでいました。田中との関係は、二筋縄ではいかない、親友という言葉では言い表すことが出来ない濃い関係でした。たくさん良い思い出も

苦い思い出もあります。社員の前で大喧嘩したこともありましたが、疎遠になった時期もありました。しかし、互いの良い部分も悪い部分も知り尽くした関係だからこそ続いたのだと思います。揉めた時に手を差し伸べてくれるのはいつも彼の方からでした。経営的に苦しくなった時も助けてくれました。二見すると理論的でクールな人間に思われがちですが、熱意をうち秘めた優しくも熱い男であったことは確かです。

彼が余命宣告を受ける前の年の2022年、彼の熱海の別荘で数回、夜中までいろいろな話をして語り合ったことがあります。長い付き合いの中で、プライベートで二人きりで長い時間を過ごしたのは、この時が初めてだったかもしれません。今思うと彼がいなくなる前に最後の時間を神様が与えてくれたような気がします。彼は言葉とビジネスが専門、一方の僕はデジタルが専門、さらに性格もほぼ間逆なタイプの二人でしたが、互いに様々な経験を経て、共通の価値観を確認し合うことができたように思います。

かつて田中が「会社でB型は鳥さんひとりでした」と僕の我儘を皮肉ったことがありましたが、ある意味彼は僕とは桁違いなほど我儘だったとも言えます。今の時代、短い人生ではありましたが、その中身は自分のやりたいことをやることが凝縮されていた。また、余命宣告を受けてからの彼のメールやSNSからは、後悔や弱気を全く感じませんでした。病を冷静に受け止め、与えられた命を充分に使いつつ、彼の人生を象徴するような潔い男らしい逝き方だったと思います。

彼が亡くなる一週間前に見舞いに行き久しぶりに会うことができましたが、痛み止めの強い薬のせいか喋ることもままならず、あまり会話らしい会話は出来ませんでした。15分ほど滞在した後、帰り際に彼がベッドから手を差し出し握手を求めてきました。言葉は発しませんでしたが「今までありがとう」の握手であることはひしひしと伝わってきました。そしていつもの言い方で「鳥さん、先に行つてね」という言葉が聞こえたような気がしました。

死んだ親父の愛人と、歌舞伎町で出遭った。

起業して4年目。まだ30歳の時だった。「もしも、田中社長でいらっしやいますか？私、一年ほど前に新宿の屋台でお会いした上田と申します」。会社にかかっていた本の電話。いきなりそう言われても…である。「どこかで出会いましたか？と私から声をかけて、その際にお名刺をいただいた者です。あれから、どうにも気になつて眠れないので、二度、私の店に遊びに来ませんか？料金はいただきますので…」。

午前時を過ぎた新宿歌舞伎町の屋台。おでんを突つきながらチューハイを飲んでた僕の隣に、白いロンクの毛皮を纏った、いかにも水商売風の50代とおぼしき女が入ってきた。隣の席に座るなり、僕を妙に気にしている。声をかけられたのは僕が勘定を済ませて立ち上がるうとした時だ。「お兄さん、私、どこかでお会いしてますよね？」。僕は特に気にも留めず、率直に返答した。「新宿には滅多に来ないから人違いだと思いますよ」。ごく日常のどこにもある「コマ。記憶を発掘するまでにかなりの時間を要したが、その夜の情景がぼんやりと浮かんできた。

それにしても一年後の今になつて…営業電話だろうか？しかし、お金はいらないと言っている。それが本当なら、夕酒が楽しめることになる。いや、待て。席についた綺麗なお姉さんが高額なボトルをおねだりしてくるかもしれない。不安もあつたが、一方で、眠れないという彼女の発言も気になり、その日のうちに新宿へ出向くことにした。

風林会館近く、飲食店ビルの2Fに「カルダングクラブ」はあつた。入口に執事のような白髪のお嬢さんが立っている、ドラマに出てきそうな高級クラブだ。「すいません。上田ママさんと呼ばれてきたのですが」。その紳士は「はい、上田オーナーから何つておられます」と優しい笑みでドアを開けてくれた。そこは、真つ赤なソファがグラッドピアノを取り囲むように配置されている、まさにお金持ち専用の遊び場。僕は、優に10名は座れるVIP席に案内され、しかも、たった二人の僕に対し、美女5人がついた。「何をお召し上がりになりますか？」と聞かれたが、想像以上の厚遇は警戒心を呼び起こす。僕は小さな声で「真露の水割りです」と

オーダーしたのだが、今更ではあるが、高級なブランドでも頼んでおけばよかった。

「田中さん、お待ちさせてごめんなさいね」と見覚えのある女性が姿を現したのは、すでに入店して2時間は経過した頃だろうか。電話をくれたその人、上田オーナーである。席につくなり、彼女はこう切り出してきた。「ところで田中さんはどちらのご出身？」。「九州の佐賀県です」。その回答に彼女は「急に表情を緩ませた。「すべてが腑に落ちました。1年前、どこかで出会いましたか？とお尋ねしましたよね。でも、あれは勘違いでした。実は私、あなたのお父様と親しくさせていたっていました」。

佐賀から上京した人間が、この大東京で…そんな小説のような出遭いが本当にあり得るだろうか。

四人兄弟の次男としてこの世に生を受けた僕は、親戚からも確かに、親父に似ている、とは言われてきた。顔はそうでもない。今、共通点を挙げるなら、佐賀電算センターという会社を創業した「起業家」だったこと。親父は大学の講師もやっていたが、僕も専門学校の講師を10年ほどやったことがある。好きなお酒は焼酎。持病は糖尿病…。確かに共通点は少ない。それにしても、である。

「今、お父様は何をしてらっしゃるの？」。「10年前に他界しました」。事実のままに答え

ると、まるでスイッチを押したように彼女からサツと笑みが消えた。「そうでしたか。私、何も知らなくて、ごめんなさいね。そうよね、独身でいると忘れちゃうけど、私もそういう歳なのね」。この時、僕は確信した。この人は死んだ親父の愛人なのだ。というのも僕が中学の頃、親父は東京出張中どこかでお酒を飲んだ後、路上で倒れ、救急車で世田谷の病院に運ばれた、と母から聞いていた。そして、混濁した意識のまま九州に搬送されることになる。以来、病床に伏せ、二度と東京に出かけることはなかった。だから、彼女は経緯を知らないまままでいたのだ。父が倒れる直前に飲んでたところは、このお店だったのである。もしかすると突然姿を消した親父がひょいと顔を出しそうで、ずっとお店を開けてくれたのかもしれない。そう思うと、息子vs親父の愛人という関係ながら、なんだか温かい気持ちに包まれた。

それから半年後、僕は再び上田さんに会いたくなくて、お店に電話を入れてみた。「この電話番号は現在使われておりません」。それ以来、今日まで二度と会うことはない。DNAが導いた、奇跡の数時間。何を目的に神様が引き合わせたかはわからないが、僕の人生のNEWSな出来事、その上位にランクされたことは間違いない。

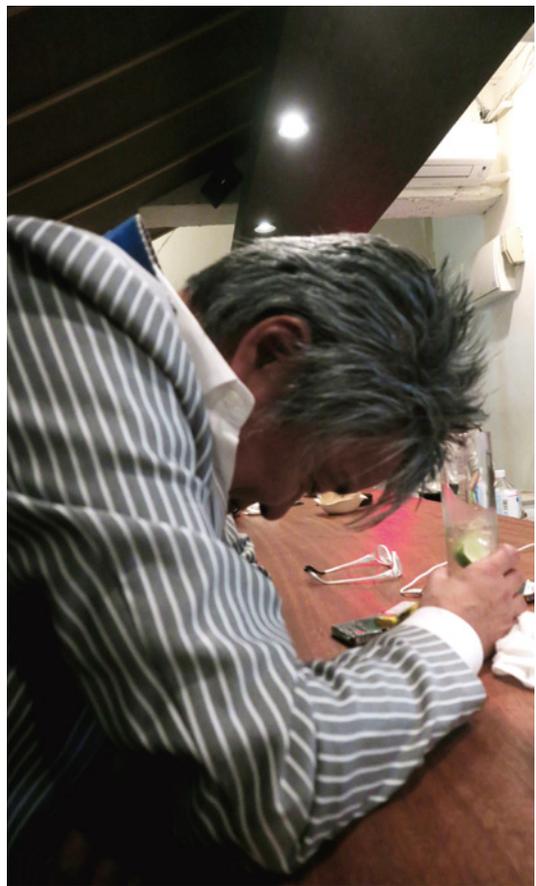
あれから23年が過ぎた。まだ小さかった娘

は中学では優等生に育ち、偏差値の高い進学校に合格した。が、わずか一年で高校を中退する。彼女の親父、つまり僕は高校こそ卒業したものの、専門学校除籍、その後に入学した大学も除籍。なんだか僕に似ているなあ…と思っていたら、後に僕の会社に入社し、社内恋愛の末お嫁に行った。僕が結婚した相手も社内恋愛だったので、そこも共通点のひとつだ。極めつけは、やがて彼女が起業したこと。そして僕同様離婚した。お酒の酔い方もそっくりで、焼酎が大好き。今では親子でボトルを酌み交わすようになってしまった。ひとつだけ似て欲しく

ないこと。それは持病の糖尿病。僕が親父から受け取った負のDNA。これだけは絶対に引き継がないでいただきたい、と切に願う今日この頃だ。
(田中公仁郎)

筆者プロフィール

昭和38年、佐賀県生まれ。23歳で上京後、「コピーライター」に。27歳の時に広告企画制作会社を設立。現在、株式会社K'sほかグループ5社を経営。六本木、熱海、京都、サイパンを精力的に巡回中。



六本木の行きつけのバーで酔いつぶれる筆者